



アイヌタイムズ

第72号

2019年12月21日(土) アイヌ語ペンクラブ

アイヌタイムズ第72号(2019年12月21日発行)からアイヌ語抜粋
著者: 横山裕之

国際母語の日(1)

(アイヌ イタク [アイヌ語])

2019パ2 チュブ 21 ト "ウサ オカ モシルン
先住民族 コリタク" パ (国際先住民族言語
年) オッタ アン "ウサ オカ モシルン クル
コリタク" ト (国際母語の日)

バングラデシュ 首都 ダッカ (東ベンガル)
オッタ シネ 大学 アン。1952 パ2 チュブ
21 ト タ、ネ 大学 オルン 学生 デモ キ
パワ、警官 オロワ テッポ アニ ア・トウカ
ン ルウエ ネ。

ネ 学生 アナク、コリタク ベンガル語
(bangla / bn / বাংলা ভাষা) アン ヒ ア・ラモシマ
ワ イ・コレ クニ デモ キ パルウエ ネ。ネ
大学 ウン ウタラ アナクネ、ベンガル語 イ
サムカ ワ タネ トウムコロ ウタラ コリタク ヤ
エイカウヌ ルスイ ルウエ ネ。

ネノ アン オルシペ アナクネ、アジア パテク
カ ソモ ネ、ヨーロッパ オッタ カ、オヤ モ
シリ オッタ カ オカイ ペ ネ ルウエ ネ。オヤ
イタク (ポロセレ 英語) ア・イエ ルスイ カ ソ
モ キ ヤッカ ア・イエ エアシリキ プ ネ ク
ス、オホンノ ア・イ・エパカシヌ ワ ア・コヤイ
ウエンヌカラ ルウエ ネ。ネ モトホ アナクネ
経済的・政治的・軍事的 権力 コロ ウタラ ネ
ワ、ウサ オカ モシリ オッタ エイカウン ク
ニ、ポン モシリ オルン トウムサク イタク オ
ラムサッカ ルウエ ネ。

国際母語の日(1)

(日本語)

2019年2月21日 国際先住民族言語年にお
ける国際母語の日

1952年2月21日に、現在のバングラデシュの
首都であるダッカ(東ベンガル)の大学で警官
がデモをした学生に発砲しました。

これらの学生は、母語であるベンガル語
(bangla / bn / বাংলা ভাষা) の存在を認めるよう
にデモをしました。この大学では、当時強い立
場にある者が話していた「より大きな」ことばが
有利となるようにベンガル語をなくそうとしてい
ました。

ここで問題になっているのは、アジアのみなら
ず、ヨーロッパのいくつかの国やその他の大陸
でも、世界じゅうで全歴史にわたり、色々な形
で繰り返し行われている先住民・原住民の言
語に対する対応です。問題の多くは、ほかの
言語 (多くの場合、英語) の学習のために行っ
た多大な努力や使用の義務や強制について
であり、これは経済的・政治的・軍事的な力
を持つ権力が原因であり、自分の国際的地位を
高めようとして地域の母語を軽視します。

「カニ アナク トウムコロ クル ク・ネ クス、イ
テキ エ・コリタク アニ イェ！ ネプ カ エ・イ
エ ルスイ ヤクン ク・コリタク アニ エ・イェ ク
ニ プ ネ ルウエ ネ」。トウムコロ クル エネ
ヤイヌ ナンコロ。

ウサ オカ モシルン ウタラ コリタク ポンノ
ポンノ ウコチャンチャンケ ワ イサム ルウエ
ネ。ネウン トウムサク ヤッカ、コリタク シネ
プ イサム ヤクン、テエタ ワノ アン シンリツ
オルシペ シパセ オルシペ カ イサム ルウエ
ネ。インネ 言語学者 カ ネノ ハウエアン
ペ ネ。2019 パ タ、国連 ユネスコ トウラ
ノ、ネワアンペ シノ ヤイトウパレ セコロ ハ
ウエアン。

2018 パ タ、ユネスコ事務局長 オードレ・ア
ズレ エネ ハウエアン ワ、世界エスペラント
協会 エウン メッセージ ヌレ ルウエ ネ。

「アオカ ウサ オカ イタク ア・エヤム クニ プ
ネ。ネ イタク ポロセレ 先住民族 コリタク
ネノ アン シサク イタク ネ ルウエ ネ。ネ
イタク アナクネ、タネ 2 週間 ピシノ シネプ
パクノ ウコチャンチャンケ ヒ ア・エラマン ル
ウエ ネ。イタク アナクネ 人類 オピッタ コロ
イコン ネノ アン ペ ネ コロカ、イサム ヤク
ン ヘトポ ア・カラ エアイカプ ペ ネ。

教育 ア・キ ヒ タ、多言語主義 (ウシンナイ
ノ コリタク ウタシパ ア・エオリパク ヒ) ア・キ
クニ プ ネ。公的政策 オッタ ヘネ、インタ
ーネット カ タ アン バーチャルスペース (仮
想的空間) オッタ ヘネ、ネノ イキアン クニ
プ ネ。ネン ネ ヤッカ コリタク カ コロ プリ
カ ソモ ア・ウエンテ クニ プ ネ。シヌマ ヤ
イカタ コロ 歴史 ネヤ アイデンティティ (自
己同一性) ネヤ、シンリツ オルシペ オロ ワ
ア・エパカシヌ エアシカイ クニ、ネノ イキ
アン クニ プ ネ」 [1]

ア・コリタク ア・イェ クニ ハットホ アン ワ オ
ヤ イタク ニサプノ ア・コララパ ヤッカ、プリ
カノ ア・イェ エアイカプ。オヤ イタク イエ
ウタラ オロ ワ ア・イ・シンナラム ワ ヤイウ
エンヌカラ・アン ワ、ウサ オカ ウエン オル
シペ アン ナンコロ。生物学的多様性 言語
の多様性 トウラノ アン ペ ネ ワ、ウシンナ
ア・ラム エアイカッ ペ ネ ルウエ ネ。

「私は強い立場にあるので、あなたは黙るか、
話したい時は、私のことばで話さない。」

言語の死…消滅が少しずつ起きています。そ
の言葉を使っていた人々は、多くの言語学者
も指摘するように、すばらしい知識の宝庫を失
います。2019 年には国連とユネスコはこのこと
について特別に注意を喚起しています。

2018 年の世界エスペラント協会へのメッセー
ジでは、ユネスコ事務局長であるオードレ・ア
ズレが次のように表明しています：

「私たちは言語を守らねばなりません。それは
主に先住民族の言語のようなまれにしか使わ
れない言語についてです。それらの言語は、
現在、2 週間に1つのペースで消滅しているこ
とを私たちは知っています。これは人類の遺産
にとっては修復のできない損失となります。

私たちは、教育の中で、多言語主義を守らね
ばなりません。それは、適切な公的な政策の
中だけではなく、インターネットのバーチャル
スペース (仮想的空間) でも同様です。このこ
とは、すべての人間集団の言語と文化の多様性
がこれからも維持され、誰でも自分の民族の
歴史やアイデンティティ (自己同一性) を、民族
のシンボルとなる起源から会得し学ぶことがで
きるようにするためです。」 [1]

母語が使えなくなることや押し付けられた言語
を十分に使いこなせないことから生じる社会的
な不公平と心理学的な諸問題のほかに、次の
ような事実も意識することも必要です：それ
は、生物学的な多様性と言語の多様性は、相
互に依存する関係にあり、別々には考えられ
ない、ということです。

言語の多様性 イサム ヤクン、テエタ ワノ
アン ウパシクマ カ イサム、ネン ネ ヤッカ
ウサイネウサイネ ウレシパ・アン クニ ア
イ・エパカシヌ プ カ イサム ナンコロ。ネ ウ
パシクマ イサム ヤクン、生物学的多様性
カ ニン ルウェ ネ。

(最終宣言、第 64 回国連・NPO・会議、ボン、
2011[2]、テラリングワ(地球語)[3])

1999 パ 11 チュブ 17 ト タ、ユネスコ アナ
クネ、2 チュブ 21 ト "ウサ オカ モシルン
クル コリタク" ト (国際母語の日) セコン レコ
レ ルウェ ネ。

2007 パ タ、国連総会 カ [4] 加盟国 エウ
ン「ウサ オカ モシルン ウタラ エイワンケ
イタク オピッタ アプンノ オカ クニ ア・エプ
ン キネ クニ プ ネ」セコロ ハウエアン ルウェ
ネ。ネ ヒ タ、2008 パ 国際言語年 セコン
レコレ ルウェ ネ。[5]

2014 パ タ、ユネスコ ウェブページ カ タ、
イリナ・ボコヴァ 事務局長 イタキヒ エスペラ
ント イタク アニ ア・ヌイエ ルウェ ネ。[6]

2016 パ タ、国連総会 アナク、先住民族
問題に関する常設フォーラム イエヒ ヌ コ
ロ、2019 パ "ウサ オカ モシルン 先住民
族 コリタク" パ (国際先住民族言語年) セ
コン レコレ クニ ラムオシマ ルウェ ネ。

ネ ヒ タ、「ウサ オカ モシリ オピッタ 6700
パクノ 言語 (イタク) アン コロカ、オロ タ
40% アナク ア・コウイナ ワ イサム エトクシ
ペ ネ」セコロ ネ フォーラム ウン クル ハウ
エアン ルウェ ネ。

ネワオカ 言語 ポロセレ 先住民族 コリタク
ネ クス、ネ 先住民族 コロ プリ ネヤッカ
エネ ヤイヌ ヒ ネヤッカ ネンカネ イサム ヤ
クン ア・シトマ プ ネ ルウェ ネ。

(オトウタヌ アン オルシペ 第 73 号 カ タク
ヌイエ クス ネ)

言語の多様性を失うと、生き残るためにそし
て、持続できる生物学的な多様性のために必
要な伝統的な知識を事実上失うことになりま
す。

(最終宣言、第 64 回国連・NPO・会議、ボン、
2011[2]、テラリングワ(地球語)[3])

1999 年 11 月 17 日にユネスコは 2 月 21 日を
国際母語の日と宣言しました。

2007 年に国際連合総会も[4]「世界の諸民族
に使われているすべての言語の保持と保護の
推進」を加盟国に呼びかけ、同時に 2008 年に
国際言語年も宣言しました。[5]

2014 年にユネスコは、イリア・ボコヴァ事務局
長のメッセージのエスペラント版も自分のサイ
トに掲載しました。[6]

2016 年に国際連合総会は、先住民族問題に
関する常設フォーラムの勧告に基づいて、
2019 年を国際先住民族言語年と宣言する決
議を採択しました。

その時、フォーラムは、世界で話されている約
6700 の言語の 40%は消滅を強いられていると
述べました。

その消滅を強いられている言語の多くが先住
民族の言語であるという事実は、その言葉を
使っている先住民族の文化と知識体系が危機
の状態に瀕していることを示しています。

(第 73 号に続きます)

[1] http://www.linguistic-rights.org/unesco/#UNESCO_103aUK

[2] www.linguistic-rights.org/dokumento/Final_declaration_64th_UN_DPI_NGO_Conference_Bonn_2011_amendments_Universala_Esperanto_A socio_UEA.pdf

(国連文書のアーカイブの複製: PDF)

[3] www.terralingua.org/our-work/linguistic-diversity

[4] www.un.org/en/events/motherlanguageday

[5] 2008 - International Year of Languages | <http://www.un.org/en/events/iyl/>

[6]www.unesco.org/new/en/unesco/events/prizes-and-celebrations/celebrations/international-days/international-mother-language-day-2014 (ユネスコ・ウェブページのアーカイブの複製: PDF)

[7] <https://en.iyil2019.org/about/>

アイヌタイムズをご購入していただける方がお知り合いでいらっしゃいましたら、お声をかけていただくと大変うれしく思います。

購読連絡先: 〒055-0101 北海道平取町二風谷 80-25 萱野志朗(宛)

購読料: 1500 円 (4 号ごと／アイヌ語版のみ)

2300 円(4 号ごと／アイヌ語版と日本語版)

読者からの投稿募集:

(連絡先): 〒047-0033

浜田隆史(宛)

北海道小樽市富岡 1-32-136

電子メール: otarunay@yahoo.co.jp

ウェブページ: <https://otarunay.at-ninja.jp/taimuzu.html>

注)アイヌタイムズの著作権は、アイヌ語ペンクラブにあります。

注)1. 赤字は、アイヌ語です。

2. 赤字のイタリック文字は、日本語由来のアイヌ語外来語です。